古文の窓❶ 無常の世を生きる

教材のねらい

日本文学に大きな影響をもたらした無常観とはどういうものなのか、そしてどのような意味を持つのかへの理解を深める。とくに中世の文学を生み出す原動力の一つになったことに気づかせ、作品の具体的な表現との関わりを考えさせる。

参考

『平家物語』の序章冒頭（「言語文化」で「参考」として採録）では、無常の理を示したのち、平清盛の話題へと移る。無常観は、栄華を極めた清盛や平家の滅亡のさまを語り起こすきっかけとなっている。歴史を語る原動力となっている。

『方丈記』では、京の都を襲った大火・辻風・遷都・飢饉・地震の五大災厄を克明に描写したのち、次のように述べる。

すべて世の中のありにくく、わが身と栖とのはかなくあだなるさま、又かくのごとし。いはんや、所により、身のほどに随ひつつ心を悩ます事は、あげて計ふべからず。

もしおのれが身数ならずして、権門の傍らに居る者は、深く喜ぶ事あれども、大きに楽しむに能はず。嘆き切なる時も、声を揚げて泣く事なし。進退安からず、立居につけて恐れをののくさま、たとえば、雀の鷹の巣に近づけるが如し。もし貧しくして富める家の隣に居る者は、朝夕すぼき姿を恥ぢて、へつらひつつ出で入る。妻子・僮僕の羨めるさまを見るにも、福家の人のないがしろなる気色を聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上ある時、その災をのがるる事なし。もし辺地にあれば、往反煩ひ多く、盗賊の難はなはだし。また、勢ひある者は、貪欲深く、独身なる者は、人に軽められる。財あれば、恐れ多く、貧しければ、恨み切なり。人を頼めば、身他の有なり。人をはぐくめば、心恩愛に使はる。世にしたがへば、身苦し。従はねば、狂せるに似たり。いづれの所を占めて、いかなる業をしてか、しばしもこの身を宿し、たまゆらも心を休むべき。

最初の一文は無常観を表している。しかしこの箇所全体で述べていることは、社会の中で生きることの難しさである。五大災厄についての詳しい描写も、平安京という都市で社会生活を営むことの危険さや不安定さを主題としている。無常観が社会のあり方を見据える視点を提供している。

『徒然草』百三十七段（「言語文化」で前半部分採録）の末尾では、

兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。世を背ける草の庵には、閑かに水石を翫びて、これをよそに聞くといへるは、いとはかなし。閑かなる山の奥、無常のかたき、競ひ来たらざらんや。その死に臨めること、軍の陣に進めるに同じ。

と無常の避けがたさが述べられている。ところがこの章段の前半は、満開の桜やくまない月や逢う恋など、物事の盛りの素晴らし

さだけを追求するような、固定観念に縛られた美意識を批判している。無常観は、そういう固定観念を脱するための心構えと、密接に関わっている。

まず、『平家物語』『方丈記』『徒然草』の中から、無常観を表している箇所を探し出すときには、「無常」の語だけではなく、「はかなし、常なし、定めなし」等の語にも注意したい。次には、その後の周辺の叙述に目を向ける必要がある。そこにはしばしば、作者のもっとも述べたい事柄が示されている。無常観は、それらと密接に関係する。無常を自覚するからこそ、ありきたりの見方に囚われることなく、独自の視点から人間やこの世を捉えることができるのである。逆に言えば、無常観は結論なのではなく、それによって認識を改めたり、新たな行動を起こしたりする媒介になる。そのことに何より注目させたい。

以下、その他の無常観の例をいくつか掲出する。

『平家物語』

祇王…「つくづく物を案ずるに、娑婆の栄花は夢の夢、楽しみ栄えて何かせむ」

入道死去…「忠を存ぜし数万の軍旅は、堂上堂下になみ居たれども、是は目にも見えず力にもかかはらぬ無常の殺鬼をば、暫時もたたかひかへさず」

先帝身投げ…「悲しき哉、無常の春の風、忽ちに花の御すがたをちらし、なさけなきかな、分段のあらき浪、玉体を沈め奉る。」

『方丈記』

「若し跡の白波にこの身を寄する朝には、岡屋に行きかふ船をながめて満沙弥が風情を盗み」

「をのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠もり居てのち、やむごとなき人の隠れ給へるも、あまた聞こゆ。まして、その数ならぬたぐひ、尽くしてこれを知るべからず」

『徒然草』

第二十五段…「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り事去り、楽しび悲しび行きかひて、はなやかなりしあたりも人住まぬ野らとなり、変はらぬすみかは人改まりぬ。」

第三十段…「人の亡き跡ばかり悲しきはなし。」

第四十一段…「我らが生死の到来、ただ今にもやあらん。」

第四十九段…「人はただ、無常の身に迫りぬることを心にひしと懸けて、束の間も忘るまじきなり。」

第五十九段…「無常の来ることは、水火の攻むるよりも速やかに、逃れがたきものを。」

第七十四段…「常住ならんことを思ひて、変化の理を知らねばなり。」

第九十一段…「その故は、無常変易の境、ありとみるものも存ぜず、始めあることを終わりなし。」

第百五十五段…「死期はついでを待たず。死は前よりしも来らず、かねて後ろに迫れり。」

第百八十八段…「人の命は雨の晴れ間をも待つものかは。」

第百八十九段…「不定と心得ぬるのみ、まことにて違はず。」

第二百十一段…「よろづのことは頼むべからず。」

第二百四十一段…「如幻の生の中に、何事をかなさん。」

解説

およそ無常観ほど生徒たちに共感しにくい思想はないかもしれない。春秋に富んだ若い人たちにとって、あらゆるものは衰微し、死滅する、といわれても実感に乏しいに違いない。頭では理解しても、同感はしにくいだろう。ここでは、文学の上で無常観が大きな働きをしていることを理解することを通じて、無常観の積極的な意義を感じ取らせたい。無常観には、表現行為の推進力になっている面があるのである。

そもそも無常とは、仏教の観念の上からは、あらゆる物事を覆う観念である。ところが、『平家物語』の冒頭では、「奢れる者」「猛き者」の滅びの運命が語られている。本来の無常観であれば、富貴にかかわらないのだから、「盛者必衰」ではなく、「生者必滅」というべきなのである。栄花を極めた者でも滅んでいくというのは、本来の無常観からいえばその改変であり、限定的なとらえ方となっている。しかしそれによって、平家の衰亡の歴史を語る原動力になったことに注意したい。歴史というのは無数の事象の集積であり、それを語るには、語るべき事柄を選択し、一連の出来事として配置する必要がある。日本的な無常観は、歴史的な事柄の中からどれを選択し、どのように物語化するかについての、有力な視点を提供したのである。

冒頭の一文に端的に表されているように、『方丈記』は、人と栖（すみか）の無常を訴えることが作品の主題である。栖は社会と人の接点となる存在だが、同時に、栖と人との関係は、社会と人との関係と類比することができるように描かれている。それゆえ、栖の無常さを述べることが、社会のうつろいやすさ、不安定さを述べることにつながり、ひいてはその社会でいかに生きるべきかを追求する推進力になる。ここでも無常観が叙述の原動力になっていることを確かめたい。

『徒然草』という作品の魅力は、何といっても、自由で囚われない、それでいて物事の本質を鋭く見抜く作者のまなざしである。こういう視点は、どうやって獲得されたのだろうか。解答例で取り上げた、第百三十七段の末尾の段落では、「兵の軍に出づるは、死に近きことを知りて、家をも忘れ身をも忘る。」と、死を覚悟した兵士にこそ無常を克服する可能性があることを示唆している。もとより彼らが、「花は盛りに月はくまなきを見るものかは。」というような美意識をもっているわけではない。むしろそうした美意識からは対極にあるといってよいだろう。この章段の中段のあたりでは、「片田舎の人」が、美しいものに対して「色こくもて興ずれ」というありさまで、彼らが祭りを見る様子も、見ものばかりにこだわって見苦しい、と否定的に扱われている。「兵」などは、その「片田舎の人」に入るはずの存在だろう。また末尾の段落では、草庵で自然を愛し、閑寂な生活を送っている遁世者が、無常から逃れえたと考えることも、愚かしいと否定している。この章段の始めの方では、深山の杉の木陰から見る月などを、「またなくあはれなれ」と賞賛していた。この月を見る人物こそ、草庵を栖とする遁世者に違いない。つまり、最後に至って、これまで自分が述べてきたことを否定しているのである。どういうことだろうか。第百三十七段は、冒頭から、固定観念に囚われた美意識や価値観を排除しようとしていた。「何となく葵懸け渡してな

まめかしきに」以下の後段も、集団の中に埋没しうると考える愚かしさを、無常観を媒介にして指摘することが主題と見られる。固定観念とは、別の言い方をすれば、旧来の発想の中に埋没することだから、この後段は固定観念を打破すべしとする前段の趣旨につながりうる。とすれば、末尾の段落は、固定観念に囚われるなという趣旨自体が固定観念となることを否定しようとしているのではないか。いわば、固定観念の打破を自ら実践しようとしていると考えられるのである。この章段の文章が自信に満ちているのは、そこまで自分を追い詰めた、という確信があるからだろう。無常観は、作者の自由な発想や視点のよりどころとなり、囚われを排せよという力強い文章をとことんまで書き切る原動力となっているのである。そのことに、ぜひ気づかせたい。

（渡部　泰明）